

番組審議会

第655回

2021年12月

■ 審議会の構成

委員総数 10名

委員長 音 好 宏

副委員長 中 江 有 里

委 員 江 澤 佐知子 尾 縣 貢
萱 野 稔 人 喜田村 洋 一
佐 藤 智 恵 長 嶋 有
藤 原 帰 一 水無田 気 流

TBSテレビ 佐々木 社 長

渡 辺 常務取締役

伊佐野 常務取締役

岩 田 取締役

瀬戸口 編成局長

中 田 編成考査局長

村 田 編成考査局視聴者サービス部長

天 野 番組審議会事務局長

■ 議事概要

(1) 審 議 事 項

1) 今年のTBSの番組全般、及び放送界の動向について
(特定の番組を対象とせず、幅広く意見を募った)

2) その他

(2) 事務局報告事項

1) 視聴者からの声について

2) 次回審議会の議題・日程について

【委員の主な意見】

◇ 今年印象に残ったTBSの番組

□「俺の家の話」「天国と地獄」「最愛」など。今年も連続ドラマは、クオリティが高い作品が多かった。

□「報道特集」。東京五輪での弁当大量廃棄など、一連の調査報道は光っていた。報道局が、調査報道に力を入れていることは、高く評価したい。

□東日本大震災10年プロジェクト「つなぐ、つながる」。6日間にわたって特別編成が生まれ、幅広い視聴者へ社会的メッセージを伝えられた。報道・音楽番組のみならず、ドラマ・スポーツも加われば、さらに意義が増すのではないか。

□「ラヴィット!」。これまでのワイドショートとは全く異なるコンセプトの番組が激戦区の時間帯でどこまで存在感を発揮できるか、とても注目している。視聴者を拡大できれば、朝8時からのテレビの風景も変わっていく可能性がある。

□「ドラフト特番 THE 運命の1日」。ドラフトで選ばれること、選ばれないこと、選ばれてもその後の成功が約束されるものではないことなど、番組で取り上げた個々の選手を超えた次元のことを考えさせられる番組だった。

□「ひるおび!」。大変安心感のある情報番組で、18年という歴史から研ぎ澄まされた「しっかり、じっくり、だからわかりやすい。」を実現している。

□東京五輪関連の報道・情報番組。ジェンダー平等やダイバーシティなど、様々な意味での「国際基準」と、これまでのドメスティックなメディア報道のあり方との落差が浮き彫りになる良い機会だった。

◇TBS全般および、今後のTBSに望むこと

□「THE TIME」で始まった列島中継は新鮮で、社会の多様性を感じさせる。こうした制作手法のリニューアル含め、表現手法などの開発を期待したい。

□ジェンダーなど、近年、価値観が一気に変わる中、TBSは「逃げ恥」以降、かつての価値観を刷新するドラマを作ってきた。一方、情報番組は、テーマ・出演者含め、少し前時代的に感じる。

□類似キャスティングの傾向が否めない。良くいえば「TBSの顔」がわかる一方、「マンネリ」の印象も。応援したくなる「顔」に安心感を覚えるのは事実なので、このバランスを意識することが、非常に重要。

□特に望むのは、時には暴走する政治に対しても、正面からものが言える立場を貫いて頂きたいということだ。

□4月から「新ファミリーコア」戦略に大きく舵を切ったことは、大いに評価できる。若い世代に視聴習慣をつけてもらえるかどうかは、今後のテレビ業界にとっても死活問題。

□SDGsプロジェクトは、TBS系の代表的なキャンペーンとして育ってきた。こうした部門を越えたキャンペーンは、オンラインメディアではなかなかできないので、今後も継続して欲しい。

□国内市場も重要だが、今後はグローバル市場にも目をむけて、番組を制作して欲しい。またNetflixなどとも、WIN-WINの関係を築いて欲しい。

□局アナは、性別・年齢で一方向的に評価されがちのようだが、一人一人が「専門職としてのアナウンサー人材」として評価されるようになれば、これまでより挑戦の機会も増えるのではないか。

◇ 放送界全般について

□同時配信サービスのスタートを機に、新たなメディア環境の中での在京民放キー局のありようについて、TBSは先頭に立って論陣を張って頂きたい。

□コロナ禍で、SNS による歪んだ世論形成が気になった。テレビは多くの正しい情報を多くの世代に届けられるので、その役割を改めて重視して頂きたい。

□テレビを視聴する人の総数は、ますます減ってしまう印象を受ける。テレビ局は若者向けの番組を制作・放送するのと同時に、中高年世代がテレビ離れを起さないような仕組みをつくるべき。

* TBSでは番組審議会委員のご意見を真摯に受け止め、今後の番組内容の向上に活かしていく所存です。(TBSテレビ番組審議会事務局)